

日本陸軍航空史（その 19）
～南方攻略に伴う航空運用（4）～

1 はじめに

18号の7ページ6行目に「昭和17年1月にシンガポールで英軍のレーダーを鹵獲」と書きましたが、『間に合わなかった兵器』著者の徳田八郎衛氏からご指摘を頂きました。明らかに『2月』の誤りでした。また、8ページ3行目の『RADER』は、『RADAR』の誤りでした。訂正させていただきます。

徳田氏から頂いたメールよりますと、「シンガポールにおける戦闘終了後、チャンギー監獄のあたりに捨てられている英軍のレーダーを見つけた」という記録があるそうです。

また、徳田氏によりますと、シンガポール島について「日本軍が占領してから昭南市という名前を押し付けた」と伝え聞いた人たちが、そう思い込んで文章を書き連ねていますが、実際には昭和15年発行の『昭南新聞』があり、「元旦には在留邦人が昭南神社に初詣に出かけた」という記事があるそうです。したがって、『昭南』という呼称は以前からあったということです。

10ページの右図の説明『タチ一三号』も『タチ二八号』の誤りでした。失礼しました。

今回は、比島平時の航空作戦及び風船爆弾について述べます。

2 比島平時の航空作戦¹⁾²⁾⁷⁾

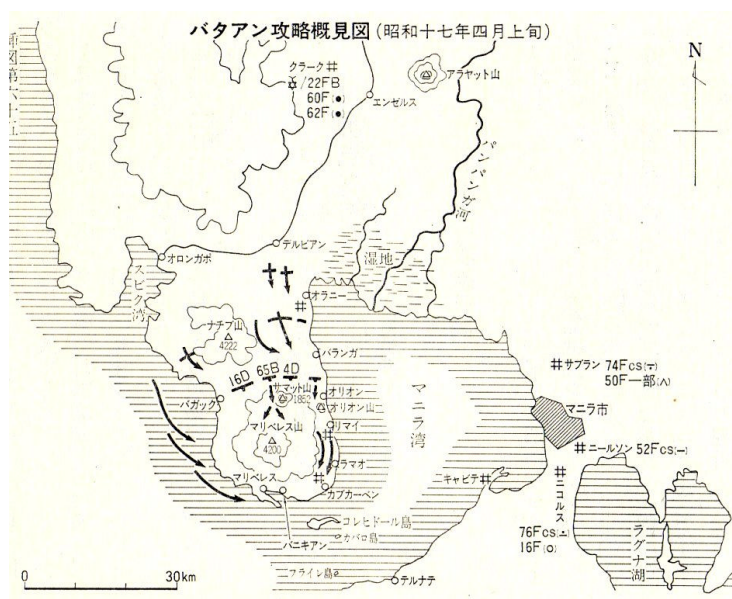
(1) 第2次バターン半島攻撃の航空支援

○ 攻撃準備のための集中

昭和17年2月上旬、第14軍は米比軍をバターン半島に追い込んだものの攻撃は遅々として進まず、4月上旬から再攻撃することになりました。そのため、第4師団、第21歩兵团等の地上部隊のほか、重爆2コ戦隊が増強されました。

第2次バターン半島攻略作戦開始までに、盛んに神経戦・宣伝戦が行われました。米比軍は「比島米比軍の士気はきわめて高く、連合軍は必ず勝利する」と宣伝し、それに圧倒されそうになった我が軍を鼓舞するため、飛行第16戦隊長・梁瀬健吾中佐が意見具申をして認められたため、3月3日、軍飛行隊約60機による示威飛行を行いました。編隊は、バターン半島、コレヒドール島、マニラ及びルソン平地上空を飛行し、日本軍の士気を高めました。

3月4日、海軍からジャワ作戦のため、予定していた中攻36機の支援ができないという通知が来たため、



バターン攻略概見図(昭和17年4月上旬)¹⁾



第14軍飛行隊の示威飛行⁷⁾

軍飛行隊長 星 駒太郎大佐は南方軍に北方転用予定の飛行第 60 戦隊(重爆)の転用延期をしてもらいましたが、飛行第 62 戦隊(97 重 II 型改変)も昭和 17 年末に北方転用するとの通知を受けました。

そして、独立飛行第 76 中隊(97 司偵 9 機)及び飛行第 16 戦隊(軽爆 32 機)はニコルス、独立飛行第 52 中隊(軍偵 10 機)はニールソン、独立飛行第 74 中隊(直協 8 機)及び飛行第 50 戦隊第 3 中隊(97 戦 10 機)はサブラン、飛行第 60 戦隊(97 重 I 型 35 機)及び飛行第 62 戦隊(97 重 II 型 25 機)はクラークの各飛行場に展開しました。

○地上総攻撃準備の航空攻撃

軍飛行隊長は海軍と協定し、総攻撃開始前の敵戦力の破砕(現地では『戦力要素破砕作戦』といいました)を 3 月 24 日～28 日の間行うよう決定しました。

そして予定どおり、リマイ要塞、コレヒドール要塞、カブカーベン飛行場、マリベレス飛行場、パニキアン基地及びラマオ市街に猛攻撃をかけます。敵航空機は飛来しないものの、敵の高射砲は活発で、しかもその精度は高く、シンガポールの比ではありませんでした。しかし、不思議なことに着発弾がなく曳光弾ばかりで、機体にブスブス穴はあくのですが、あまり我が機に対する致命傷にはなりえなかったという小川小二郎飛行第 60 戦隊長の回想があったそうです。

3 月 29 日、軍は総攻撃開始を 4 月 3 日とし、軍飛行隊に戦力要素破砕攻撃を 4 月 2 日まで続けるよう命じました。そして、パニキアン、カブカーベン、リマイ、ラマオ、マリベレス、サマツ山南方地区及びコレヒドール島の爆撃を行い、バターン半島の砲兵陣地、オリオン山付近の陣地も爆撃しました。

4 月 2 日には第 22 飛行団(長・三上喜三少将)司令部の編成が完結し、クラーク飛行場に司令部を置くとともに第 14 軍飛行隊の任務を引き継ぎましたが、星大佐以下の従来の指揮関係をそのままにして総攻撃に直接協同させました。

○ 地上総攻撃直接協同の航空攻撃

・ 陣地及び砲兵の爆撃

4 月 3 日 0900 に効力射準備射撃開始、1000 以降、300 門をもって攻撃準備射撃が実施されました。軍砲兵は、ナチブ山東側に観測用気球を上げました。第 22 飛行団は戦闘隊の掩護下、飛行第 16 戦隊(軽爆)延 59 機、飛行第 60 戦隊(97 重 I 型)延 54 機及び飛行第 62 戦隊(97 重 II 型)延 34 機で地上部隊前面陣地及び砲兵を爆撃しました。そして 15 時以降、地上部隊が米比軍第一線陣地に突入しました。

4 月 4 日、地上部隊は前進を続け、第 16 戦隊の延 54 機で第 4 師団と第 65 旅団前面の陣地、第 60 戦隊の延 45 機でオリオン山、サマツ山付近陣地、第 62 戦隊の延 34 機で第 16 師団前面の陣地を爆撃しました。次いで 4 月 5 日には、第 16 戦隊の延 56 機、第 60 戦隊の延 45 機、第 62 戦隊の延 36 機でサマツ山及びオリオン山付近の敵陣地及び敵砲兵陣地を爆撃し、地上部隊はサマツ山を核心とする米比軍陣地を突破しましたが、カポット台方面の敵は頑強な抵抗を続けました。

そして 4 月 6 日には、第 16 戦隊の延 61 機でリマイ付近の砲兵陣地、第 60 戦隊の延 47 機でリマイ付近の陣地、第 62 戦隊の延 37 機でオリオン山付近の砲兵陣地を爆撃し、地上部隊がサマツ山を占領しました。

・ 退却部隊攻撃

4 月 7 日からは敵の退却部隊に攻撃を行いました。4 月 7 日、第 16 戦隊の延 78 機で米比軍車両部隊、第 60 戦隊の延 47 機でリマイ付近陣地、第 62 戦隊の延 44 機で米比軍砲兵及びカブカーベン

市街を爆撃しました。この際、激しい対空射撃によって中破×4機、小破×13機の損害がありました。**第50戦隊第3中隊(97戦)**は、制空任務の傍ら投降勧告のビラ散布を行いました。夕刻、敵はバター半島南部のカブカーベン及びマリベレス方向へ続々と退却を始めました。

道路の傍らには、大量の弾薬や食糧が遺棄しており、乾パンばかりをかじっていた日本軍将兵にとって、ソーセージの缶詰は実に珍味でした。しばらくは三食とも副食にソーセージの缶詰が出て、質素な食事に慣れていた日本兵には胃の負担になったようで、「沢庵のほうがいい」と言うぜいたくな者もいたそうです²⁾。

4月8日は、**第16戦隊の延73機**で退却部隊攻撃、**第60戦隊の延42機**でカブカーベン、**第62戦隊の延18機**でパニキアン及びラマオ付近を爆撃しました。この日、地上部隊はリマイ、カブカーベンの両飛行場を占領しました。また、この日に配属中の**第50戦隊第3中隊**を原隊復帰させ、ハノイから独立飛行第84中隊の一部(97戦6機)/第21独立飛行隊の配属を受ける旨の南方軍命令を受領しました。

・ 半島南部の掃蕩支援

4月9日0700、第4・第16師団がマリベレスに向かって前進を開始したところ、バター半島米比軍(ルソン軍)総指揮官・キング少将の軍使が現れ、降伏を申し入れます。

そこで、攻撃部隊に同行していた、中山源夫**第14軍高級参謀**が全米比軍の降伏を申し入れますが、**キング少将**が応じなかったため、第14軍はさらに攻撃を進め、飛行団はこれを掩護するために、コレヒドール島及び付近の艦船を爆撃し、4月12日には掃蕩を終えて多数の捕虜を得ました。



投降した米比兵⁷⁾

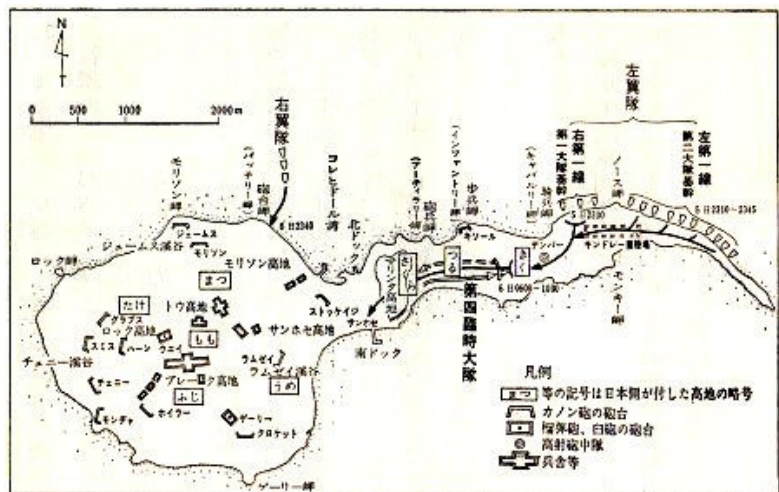
○ コレヒドール要塞攻略の航空支援

・ 第14軍の攻撃計画

4月12日現在、コレヒドール要塞の米軍主力(第14軍の見積りでは、5千~1万名、砲兵5コ聯隊、海兵1コ聯隊)は依然として強い抵抗を示していました。

米軍資料によると、砲台は23カ所あり、砲56門、高射砲24門、対空機関銃48丁、探照灯5基がありました²⁾。

また、マリクタ高地地下には迷路のようなトンネルが張り巡らされていました。



コレヒドール島の防御施設及び戦闘経過の概要²⁾

第14軍は、4月28日までに攻撃準備完了、第4師団主力をもって、5月5日夜から6日にかけて上陸、これを攻略することとしました。

・ 第 22 飛行団の作戦部署

第 22 飛行団長は、引き続き星大佐に飛行部隊の大部分を指揮させることとし、これとは別に、独立飛行第 52 中隊(軍偵)長に飛行第 16 戦隊(軽爆)の一部を指揮させ、レガスピー、次いでイロイロ飛行場に展開して、中・南部比島方面に残存する敵機を制圧するとともに、地上部隊の平定作戦に協力させました。ハノイから転用された独立飛行第 84 中隊の一部は、4 月 11 日以降サブラン飛行場に展開し、このころ、第 50 戦隊第 3 中隊がビルマに向かって出発しました。

4 月 22 日、三上飛行団長は星大佐に、「独立飛行第 74 中隊(直協)の 6 機、独立飛行第 52 中隊(軍偵)の一部、飛行第 16 戦隊(軽爆)の 1 中隊及び独立飛行第 84 中隊(97 戦)の一部を指揮し、セブ及びダバオ飛行場に展開して同方面の平定作戦に協力する」よう命じるとともに、独立飛行第 52 中隊主力はマニラに帰還させ、コレヒドール攻撃準備に当たらせました。

これに先立ち、4 月 18 日にはドゥリットル空襲がありました。これは空母を飛び立った B-25 が帝都を爆撃し、そのまま支那大陸に着陸したもので、今後の対処のため大本営は、重爆 2 コ戦隊のうち、飛行第 62 戦隊(97 重 II 型)を支那大陸に派遣するよう命じました。第 62 戦隊は 4 月 26 日にクラークを出発して南京に向かい、第 1 飛行団長の指揮下に入りました。

・ コレヒドール島の爆撃

第 22 飛行団は 4 月 29 日に爆撃開始、第 16 戦隊の延 33 機でコレヒドール島の高射砲陣地、第 60 戦隊の延 50 機でコレヒドール島砲台及び高射砲陣地を爆撃し、4 月 30 日には第 16 戦隊の延 16 機、第 60 戦隊の延 35 機でカバロ島及びコレヒドール島を爆撃、5 月 1 日には第 16 戦隊の延 23 機、第 60 戦隊の延 45 機でコレヒドール島及びフライレ島を爆撃しました。

5 月 2 日、第 14 軍砲兵隊の攻撃準備射撃のため、飛行団は独立飛行第 52 中隊の 5 機を協力させるとともに、第 16 戦隊の延 20 機、第 60 戦隊の延 3 機でカバロ島及びコレヒドール島を爆撃しました。また、5 月 3 日～4 日、独立飛行第 52 中隊の主力を軍砲兵隊の攻撃準備射撃に協力させるとともに、第 16 戦隊の延 41 機、第 60 戦隊の延 80 機でコレヒドール島を爆撃しました。

占領後に判明したことは、建築物に対しては爆弾の効果があつたものの、砲台に対しては 250 キロ爆弾以上でなければ効果がなく、また命中弾はわずかであつて、急降下爆撃が必要であることと、徹甲被帽爆弾が必要だということでした。

・ コレヒドール上陸作戦直接協同

5 月 5 日、いよいよ上陸作戦が開始され、軍砲兵隊は昼間と 1800～1900 の間、上陸前の制圧を行いました。飛行団は早朝から、第 16 戦隊の延 25 機、第 60 戦隊の延 45 機で、第 4 師団の上陸予定地域を爆撃しました。軍砲兵隊は 2230 から 5 分間インファントリー岬付近に発煙弾及び榴弾射撃を行い、2245～2300 の間、徹底的な上陸支援射撃を実施しました。

上陸時刻は 2300、上陸点はキャバルリー岬の東西に予定されていましたが、西流していると予想した潮流が、島の北側近くでは東流していたこと、舟艇部隊の未熟、友軍砲兵が上陸点の西側に阻止射撃を実施したので、西に行くのは危険だとの錯誤が重なって、左翼隊の右大隊が左大隊の上陸予定地点、左大隊はさらに東方、それぞれ 1km 東に偏しました。

そのため、左大隊は断崖による障害と、一度も制圧射撃を受けたことのない敵の近接火力により、第一線舟艇 19 隻中 9 隻沈没という大損害を受けます。それでも左翼隊の右翼大隊だけで激闘を続け、5 月 6 日 0200、キャバルリー岬の西南西約 500m の高地にある陣地を奪取します。

1000 ころから何度も敵の逆襲があるのですが、1200 までに上陸点の一角を確保したところで、1330、米極東軍司令官ウェンライト中将からの降伏の申し出を受けました。

本間軍司令官は直ちにウェンライト中将をカブカーベンに招致して会見しますが、今度も、コレヒドール島要塞だけの降伏であり全面降伏ではなかったため、同中将を要塞に返し、攻撃続行を命じます。

そして、第 16 戦隊の延 87 機、第 60 戦隊の延 83 機で、コレヒドール島、カバロ島、フライレ島を爆撃し、2315～2330 の徹底的な上陸支援射撃ののち、第 4 師団の右翼隊が 2340、抵抗を受けることなくバッテリー岬南東地区に上陸しました。

その後、左翼隊と右翼隊が合流して島内を掃蕩し、5 月 7 日 0830、全要塞を制圧、次いで 1200 すぎにカラバオ島、フラレイ島を攻略、ウェンライト中将は左翼隊佐藤大佐に在フィリピン全米比軍の無条件降伏を申し出て降伏文書に署名しました。

3 風船爆弾開発の経緯と成果³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾

(1) 概要

風船爆弾は『ふ号兵器』と呼ばれ、コウゾ和紙をこんやく糊で 5 層に貼り苛性ソーダ液を塗って強化した風船に水素を充填したものです。『ふ』は風船の頭文字だと思います。

これを使用した米本土攻撃作戦を『ふ号作戦』と呼びました。戦果は爆弾による死者 6 人(オレゴン州。ここが米本土攻撃による死者が出た唯一の地になりました)と山火事が 3 件だけですが、米国軍に与えた心理的効果は絶大でした。



オレゴン州に到達した風船爆弾
(米軍資料)⁶⁾

(2) 開発の経緯

気球による遠距離攻撃の構想は昭和 8 年ころからあり、東満洲から当初ウォロシロフ飛行場、のちにウラジオストックを攻撃しようとするもので、到達距離は 100km を目標と考えていました。

昭和 14 年には北満気象聯隊の中に専任部隊が作られ多数の気球が整備されました。昭和 17 年～18 年ころには関東軍において、有人の『隠密空輸挺身隊』構想もあったようです。

参考文献 4 に収められています『風船爆弾の研究発端』と題した堀内 旭氏(陸士 31 期、少将)の随筆を紹介します。

昭和 16 年 10 月、航空本部保安課長・堀内大佐を中央气象台長・藤原咲平氏が訪れ、「亜成層圏を強い風が吹いているので、これを活用する方法はないか」と提案し、2 週間後、アジアから太平洋、北米大陸にわたる、詳細な月ごとの亜成層圏気流図を持参しました。喜んだ堀内大佐は航空総監部教育部長・寺田濟一少将に報告、同少将も喜び航空総監・安田武雄中将に報告するよう指導、堀内大佐は総監に報告しましたが、同期生である軍務課長・真田大佐は、「風船爆弾なら既に完成してソ満国境に置いてある。そんな話は古い」と言います。

この発言で陸軍が米本土攻撃を考えていないことを知って危機感を持った堀内大佐は航空本部兵器部長に相談しますが、「堀内君、風船爆弾なんかには手を出すのは航空の邪道だよ」と拒否されました。そこで燃えたのが堀内大佐でした。自分の部署ではできないため、第四技術研究所(相模原:戦車、自動車)に研究を依頼し、所長の篠田少将はこれを快く受け入れました。



太平洋上の風船爆弾
(米軍資料)⁶⁾

(3) 開発の促進

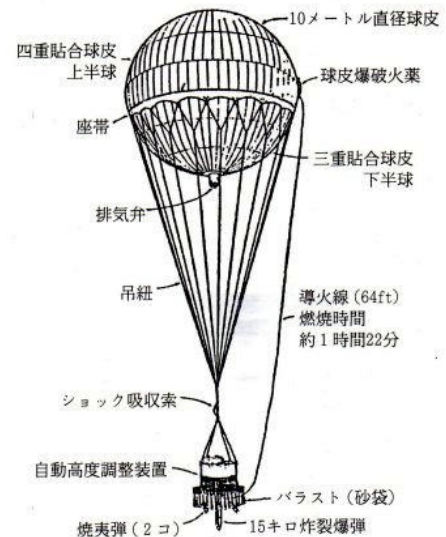
米本土爆撃用長距離風船爆弾開発の機運が高まる契機となったのは、ドゥリトル空襲でした。これに対してなんとか報復するための手段として検討が開始されました。同年 9 月には機密の『大臣訓令 128 号』が出され、9 月 30 日に風船爆弾の初会合が行われました。

昭和 17 年秋ころからは、艦船で米国本土に接近してから発射するという方法が唱えられ、昭和 18 年初頭、攻撃距離 1,000km を前提として潜水艦による接近を海軍に打診しますが、海軍は南方作戦が急になったからという理由で断ります。しかし、本音は海軍で秘密裏に小型紙製気球の研究を始めていたため、これは陸海軍の根深い対立感情によるものでした。

(4) 遠距離『ふ』号の完成

昭和 18 年 8 月、兵器行政本部(昭和 18 年創設)から第九陸軍技術研究所(登戸:極秘兵器担当)に本格的な研究命令が発せられますが、海軍はこれに張り合うかのように昭和 18 年 9 月に極秘の大臣訓令を出し、9 月 30 日には風船爆弾の海軍初会合を行いました。次いで昭和 19 年 3 月、海軍大臣訓令第 1328 号『青島における風船爆弾用気球の実験命令』が出され、5 月にこれを仄聞した東條総理がその不合理性から一致協力を指示し、初めて陸海軍の合同会議が行われました。

そして、昭和 19 年 6 月末日、実験の成功と 11 月 3 日の明治節に初攻撃を行うべく準備に入ったことを陛下に奏上し、島田海軍大臣は、「陸軍で優秀な成果が出ているものを海軍において別個に実験を行う必要はない」として海軍の実験を中止し、研究結果を陸軍に提供させました。



風船爆弾要図³⁾

昭和 19 年 2 月～3 月の間に実験用気球 200 個が作られ、8 月に試験を終了しました。直径 10m、爆装は 15kg 爆弾×1、焼夷弾×2 を標準として、各種組み合わせがありました。

アネロイド気圧計とバラストの組み合わせによって、高度が下がると電気で砂のバラストの麻紐を焼き切って上昇する自動高度調整装置が装備されており、初期の飛行高度は 10km、終末期(バラスト投下完了時期)の飛行高度は 12km となるように設計されました。最初の実用気球は昭和 19 年 11 月初旬に完成しました。

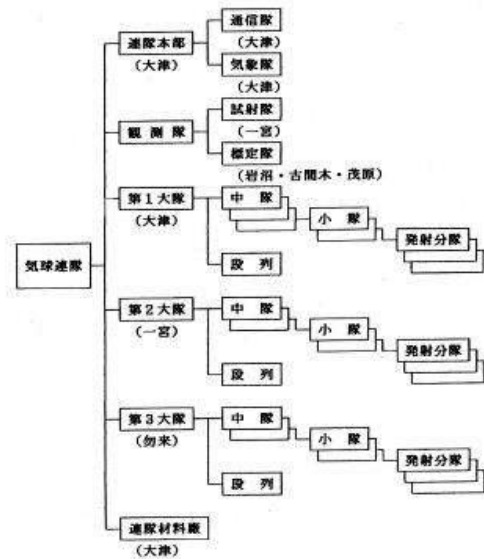
(5) 風船爆弾攻撃の状況

昭和 19 年 5 月には、「1 万個を整備する。10 月までに少なくとも半数を製造する」としました。「いかなることがあってもソ連に飛んでいかないようにせよ」との陛下のお言葉があり(ソ連に戦争終結の仲介を頼んでいましたから)、基地は福島県勿来、茨城県大津及び千葉県一ノ宮に決まりました。

実施部隊は、千葉県の気球聯隊を改変して充当しました。大正 14 年(1925 年)に航空兵科が独立した際、気球隊は航空兵科となりましたが、昭和 11 年に気球聯隊と改称された際に砲兵科に移管、その後、昭和 19 年に改変されて大本营直隷となりました。

昭和 19 年 11 月 3 日、上記 3 箇所からの攻撃が開始されました。順調に飛ばば冬場で 2～3 日、到達率 60%、夏場で 7 日～10 日、到達率 20%と見積もりました。

米国ではこの爆弾について**厳重な報道統制**を布きましたので、**上海同盟電**の「日本文字の記された巨大な気球が12月11日、モンタナ州カリスペル付近の山岳地帯に落下しているのが発見された」、**廣東同盟電**の「モンタナ州、ワイオミング州、ネブラスカ州、アイダホ州等の民衆の間では、夜空を相当の速度で西から東へ浮遊する不気味な物体を目撃したものが多数いる」と、米国で発行の**中国語新聞『タケンパオ』**に「モンタナ州に日本製の気球らしいものの残骸が見つかった」という記事の、たった3件の情報しか得られなかったために、成果がなかったものと認め、また、気球製造工場や川崎の昭和電工(水素の製造会社)もB-29の爆撃を受けて補給が困難となったため、昭和20年3月末をもって攻撃が中止されました。



気球連隊の編成の概要(昭和19年9月26日)³⁾

結局1万個製造し、使用されたのは約6千個だといわれています。しかし、おもしろいのは、流山市江戸川台にお住まいのHさん(80歳)が学生時代、房総半島の海岸で打ち上げるところを見られたそうですので、打ち上げは秘密ではなかったということです。何やら、当時のおおらかさを感じました。

(6) 米国の対応

米本土に何個の気球が到達したのか、正確な数字は不明ですが、**米西岸防衛参謀長**は9百ないし千個と述べていますから、6千個に対して千個ですと、到達率は約17%になります。

米国の記録によると、1944年11月4日から1945年8月8日までに285件の事案が記録されており、発見は120個(うち35個は不発爆弾装着のまま)で、撃墜したのは20個でした。

爆発騒ぎは28回あり、関連事件は85件とされています。犠牲者は、オレゴン州南部、クラマス湖近くの森林公園に遊びに来ていた母親と5人の子供で、不発弾に触れての事故でした。

ワシントン州ハンフォード原子爆弾工場で一時的な停電を起こさせたこともありましたが、火事が3件のみだったのは、ほとんど積雪時期に発射されたからで、夏季ならば大火災が発生する恐れは十分でした。



風船爆弾到達・落下地点要図³⁾

米軍は、オレゴン州の山地を焼夷弾攻撃した**藤田信雄兵曹長**の例(1942年9月9日に潜水艦・伊二十五号から零式小型水上偵察機で飛び立って攻撃)もあり、風船爆弾も潜水艦から放たれたものと考えましたが(日本のスパイが放ったという憶測もあったようです)、風船爆弾から発せられる電波(日本からの追跡用)を観測しているうちに日本本土から放たれたことを突き止め、砂の成分分析から、気球が宮城県塩釜あるいは房総半島東海岸から放たれたものと推定します。

また、気球の水素がボンベ詰めでないこと、気球の漏洩率は当時の米国のゴム引き布製気球の十分の一だということ、直径を 19m にすれば、約 300kg のものが運べ、これは**特攻人間気球**になり得ると分析しました。実際に我が国には**有人飛行船による米本土攻撃や特攻**を唱える少壮軍人がいました。

国防省は、**風船に仕掛けられている可能性のある兵器とその目的とを分析し、四つの防衛作戦**を立案しました。**第一**は予備役や消防隊を中心とした**山火事への迅速対応作戦**、**第二**は**生物・化学剤対処作戦**、**第三**は気球の本土接近をレーダー網で探知し、**戦闘機等で撃墜する作戦**、**第四**は日本の放球基地や製造関連施設を叩く**戦略爆撃の強化**でした。

米国政府は特に、**新兵器に対する未知の恐怖から国民の心理的パニックが発生することを恐れて報道管制**を行いました。オレゴン事案(米国では『**オレゴンの悲劇**』として有名になりました)が発生後これを解除し、国防省は、「**発見した場合は、近寄らずに報告する**」よう警告しました。

日本陸軍の担当者は当初、投下兵器について、**宣伝ビラ、細菌、害虫散布**などについても候補に上げましたが、責任者の**草場少将**は「**構想段階で、それらを使用してはならないと上(かみ)から達せられた**」と述べています。昭和天皇のヒューマニズムに敬服する次第です。

おわり

次回は「南方攻略に伴う航空運用 (5)」

< 参 考 文 献 >

- 1) 「戦史叢書 南方進攻陸軍航空作戦」(昭和 45 年 3 月 防衛庁防衛研修所戦史室)
- 2) 「陸戦史集 12 ルソン島進攻作戦」(昭和 48 年 7 月 2 刷 陸戦史研究普及会 原書房)
- 3) 「戦史アラカルト(92) 風船爆弾について」(平成 11 年 12 月 『陸戦研究』 陸戦学会)
- 4) 「陸軍航空の鎮魂」(昭和 54 年 3 月 2 版 航空碑奉賛会)
- 5) 「風船爆弾と日米情報戦」(出版時期不明 『郷友』 喜田 邦彦 (社) 日本郷友連盟)
- 6) 「戦史叢書 陸軍航空の軍備と運用(3)」(昭和 51 年 5 月 防衛庁防衛研修所戦史室)
- 7) 「1 億人の昭和史 ③太平洋戦争」(昭和 51 年 1 月 毎日新聞社)